

大学図書館で電子ブックを利用する — 過渡期における現況報告 —

ほ さか む つ み
保坂 睦

(三田メディアセンター課長)

1 はじめに

2007年に筆者が「電子ブック導入その後——メディアセンターにおける利用と展望」という短い記事¹⁾を執筆してから10年以上が経過した。当時はメディアセンター（以下「MC」とする）で電子ブックを導入して数年という時期であり、まだまだ利用者にも図書館側にも使い勝手が良い環境にはなかった。Ex Libris社のディスカバリーシステム「Primo」を採用した蔵書検索システムKOSMOS導入、およびKOSMOS経由での電子リソースへのリモートアクセス実現（2010年度）、電子学術書利用実験プロジェクト実施（2010～2012年度）ならびに8大学共同実験プロジェクト参加（2013～2014年度）、試読型選書システム（DDA）機能を持つ電子ブックシステムの導入（2016年度）などを経て、2018年現在、慶應義塾大学における契約電子ブックの利用動向と環境はどのように変化しているだろうか。2017年までの電子ブック提供状況の変遷と技術的な側面については、稲木による「慶應義塾大学における電子書籍の取り組み」²⁾に詳しい。また、DDAの導入経緯、コレクション内容や購入依頼の現状、電子ブックタイトル管理の詳細などについては、本特集の他の論考を参照されたい。ここでは主に、KOSMOSを経由する利用者（学生、教職員）と、その仕組みを提供、説明する側の図書館スタッフの視点から、電子ブック利用の現況について述べる。

2 KOSMOSを経由した電子ブックの利用

従来、MCで契約した電子ブック類へのアクセスは、提供ベンダーや出版社側から供給されるMARCデータをKOSMOSへ取り込み、検索結果にアクセスリンクを表示させることで実現していた。2016年度に入って、ProQuest社のEbook Central Mediated DDA（以下「Ebook Central DDA」）を契約開始したことをきっかけに、いくつかの契約電子ブックコレクション³⁾については、Ex Libris社が提供

するウェブスケール・インデックス：Primo Central Index（以下「PCI」とする）のKnowledge Base（以下「KB」とする）登録情報を利用し、アクセスリンクを表示する方式を採用することとなった⁴⁾。特に、Mediated DDA（5分間の試読後、購入をリクエストできる機能）を提供するEbook Central DDA、試読モデル契約を開始していた丸善雄松堂提供のMaruzen eBook Library（以下「MeL」とする）は、常に提供側の意向によってタイトル追加や削除が行われ、コレクション内容が変動するため、そのたびにKOSMOSのMARCデータを手動で入れ替えることは現実的に難しい。となると、PCIのような外部KBから、常時メンテナンスされる書誌データを利用する方が合理的というわけである。かくして、2016年6月以降のKOSMOSには、Ebook Central DDAから約70万件（主に欧米諸語）、MeLから約2万件（主に和書）の書誌データが登録され、突然、大量の電子ブックタイトルが利用者の目にふれることとなった（2018年8月現在、Ebook Central DDAが約80万件、MeLが約5万件となっている）。なお、試読サービスが提供されていない、あるいは、「出版社側の都合でシステムから削除されてしまったがデータとしては残ってしまう」などの事情から試読アクセスができない書誌データも常に一定数あり、必ずしもKOSMOSに表示されるすべてのタイトルが試読できるわけではない。

当初、アクセスに制限のある試読タイトルをKOSMOSへ登録することには、図書館スタッフ内においても賛否両論あり、KOSMOSはあくまでも「蔵書検索システム+契約電子リソース群へのアクセスポイント」であるべきだ、という意見も一部にあった。しかし、購入したタイトルのMARCデータを手作業で搭載する従来の方法は、購入数や更新頻度の増加から管理の限界に近づき、なによりKOSMOSに登録・反映されるまでのタイムラグ（約1ヶ月）が大きいことが問題となる。更新の早いPCIのKBを活用し

て、契約電子リソースのみならず、試読タイトルをKOSMOSの検索対象とし、最新の電子ブック情報と新しい購入依頼方法を提供することは、本学にとって、冒険的ではあるが有用であると考えられた。これは、それまでMCが踏み込んでこなかった、“蔵書目録”を超える領域への一步を意味するものでもある。また、電子学術書利用実験プロジェクトの結果報告類にて、“何を置いても必要とされるのは、コンテンツの充実である”、“[マスデジタイゼーション(大量電子化作業)]が不可欠である”との指摘⁵⁾がなされていたが、数十万件もの規模を持つEbook Central DDAの導入は、まさにそれを実現するものでもあった。そして忘れてはならないのは、大量の電子ブック情報をKOSMOS上で検索可能とすることが、利用を促進する大きなキープポイントとなりうる、ということである。試読のため全文へのアクセスが短時間に制限されてはいても、シームレスな購入依頼につなげていくことができ、かつ、利用者に対してKOSMOS検索から新たな「発見」と「利用」の形を提供できることが大きく期待された。

教職員や学生に電子ブックを効果的に利用してもらうためには、KOSMOSを検索したらすぐ、適切な場所に電子ブックの書誌データを表示し、視認性を高める必要がある。そこで、各MCのレファレンス担当者で構成される「全塾レファレンス担当者会議」(以下「全塾レファレンス担当」とする)では、KOSMOSにおける表示方法を議論し、検索結果内に紙の本と同タイトルの電子ブックデータが存在する場合は、それらを必ず検索結果の1ページ目に表示する「プースト」という機能を採用することにした。また、館内の所蔵検索用端末では契約電子リソースへのアクセスを制限していることから、紙の本を探す利用者に対して、検索結果を絞り込める(電子リソース類のデータを除外できる)ファセット機能の「オンライン/オンライン以外」という項目を積極的に活用してもらうよう、各種の広報を強めて対応することとした。

しかし、こうした変更がすぐに利用者浸透するかといえば、そうは問屋が卸さない。紙の本を利用する目的を持って来館した利用者は、所蔵検索用端末にて「オンラインアクセス」と表示される情報に多く触れることになり、さらにファセット機能による絞り込みにも気づくことができない、という状況が

生まれてしまったのである。結果として「紙の本の所蔵をうまく見つけることができない」「紙の本が見つけられないので、“オンライン”と表示されているものを使いたいの、館内の所蔵専用端末からはアクセスできないのはなぜか」などの苦情や質問がサービスカウンターに多く寄せられることになった。

3 電子ブックへのとまどいと不満

利用者のとまどいは、そのまま利用者対応を担当するスタッフのとまどいでもある。現在のKOSMOS上では、紙の本の所蔵情報、電子ジャーナル、電子ブックへのアクセスリンクが混在し、そのうち一部の電子ブックではアクセス時間が制限されていたり、アクセスそのものができなかったりする。さらに、電子ブックの検索結果内では、「制限なく全文アクセスができる購入済タイトル」と、「5分間の試読しかできない未購入のタイトル」を、区別して表示することができていない(PCIのKBから供給されるメタデータには、各電子ブックの契約情報が含まれないためである)。こうした複雑な状況下で、利用者から電子ブックの利用に関する質問が発生したとき、その対応は、質問者の所属や利用状況(アクセスしている場所や使っているデバイス、利用プロセスのどの段階で質問を開始しているかなど)により、個々に異なる。残念ながら、カウンターに立つすべてのスタッフが状況を理解して利用者へ明確な説明を行うことは難しいと言わざるを得ない。そのため、状況の切り分けが可能な、かつそれに応じた対応ができるスタッフ(レファレンス担当者など)へのボタンタッチなどが必須となる。ただし夜間や週末開館時などでは専任職員が不在となることから、対応にはおのずと限界がある。一部のスタッフには、説明にだいぶ苦勞をさせてしまったかもしれない。

導入当初よりも落ち着いてきたとはいえ、2018年度現在でも、学生や教員が入れ替わる学期はじめなどには、電子ブックのアクセスに関する質問が絶えない。各MCのレファレンス担当は、それぞれ情報リテラシーに関するセミナーやオリエンテーションの実施、授業協力などを行っており、そうしたプログラム内で電子ブックの利用方法や試読タイトルの購入依頼方法などについて説明する機会がある。また、各MC協議会や学部別の図書委員会、新任教員ガイダンスなどで、教員にも説明している。ただし、こう

電子ブック：試読型選書システム (DDA) を導入して

した方法では、たまたま参加・出席した（かつ、きちんと聞いていた）利用者にはしか情報が届かないことが難点である。広範囲の利用者に対して、電子ブックの存在とその利用方法を認識してもらうためには、複数のチャンネルを準備したほうがよい。各MCのレファレンス担当者は、電子ブック利用の説明を含む広報誌やチラシを作成して、各種セミナー時の配布、教員メールボックスへの投函、館内自由配布を行うほか、KOSMOSや各MCウェブサイト上からアクセス可能な日本語のオンラインヘルプ（図1）⁶⁾を配置するなど、周知に努めている。



図1 オンラインヘルプの画面例

とはいうものの、一度説明を読んだ／聞いたからといって、誰もがすぐに電子ブックにアクセスでき、購入依頼の仕組みが使いこなせるようになるわけではない。根気よく試せばなんとかなる、あるいは慣れるしかないという状況であることは確かで、現状の電子ブック関連サービスは、「一見してわかりにくい」「クリックしたりログインしたりがいちいち面倒な」状態にあることは明白だろう。2017年秋に実施されたLibQUAL+[®]調査⁷⁾の自由記述では、「電子ブックにたどり着くまでの段階が煩雑でわずらわしい」「検索しづらい」「Ebook Central DDA, MeLのインターフェースが読みにくい、使いづらい」「画像の質が悪い」「ダウンロードや印刷量に制限があって困る」「KOSMOS上で『試読タイトル』であることを示してほしい」「リクエストから購読開始までの時間がかかりすぎる」「購入済の電子ブックが少なすぎる」、「電子ブックの利用可能性が以前に比べて悪化している（以前は電子ブックの全文にすべてアクセスできていたのに）」などの不満が、主に大学院生や教員から多く寄せられた。不満があるということは、ある意味「使っている」「関心がある」と

評価することができるかもしれないが、現時点ではこれらの批判（評価）を真摯に受け止めるしかない。

実際にカウンターやセミナー等で説明を担っている三田MCレファレンス担当者にインタビューしてみると、利用者の層により試読タイトルへの反応が異なることが伺える。以下に、必ずしも類型化できるわけではないが、ざっくりとした印象をまとめた。人文社会科学系の学部・大学院を擁する三田キャンパスにおいては、特に海外の電子ブックについて、大学院生や教員による研究目的での利用率が高いようである。

(1) 学部生・通信教育課程生

主に日本語資料を利用することが多いためか、MeLについての質問がたまにある程度。通信教育課程生にはリモートアクセスが許可されていないため、遠方居住者による（電子リソース全般に対する）アクセス希望が寄せられる。

(2) 大学院生・教員

諸言語の資料に対するニーズが高く、Ebook Central DDAに関する質問が多い。購入依頼の方法を理解した後はリピーターになりやすく、実際によく利用する。検索結果から「発見」があることも承知しているが、必要な本に対してすぐに／短時間しかアクセスできないストレスがあり、システムへの不満が大きい。年齢層によっては、電子ブックの利用そのものが困難な場合もある。

(3) 留学生

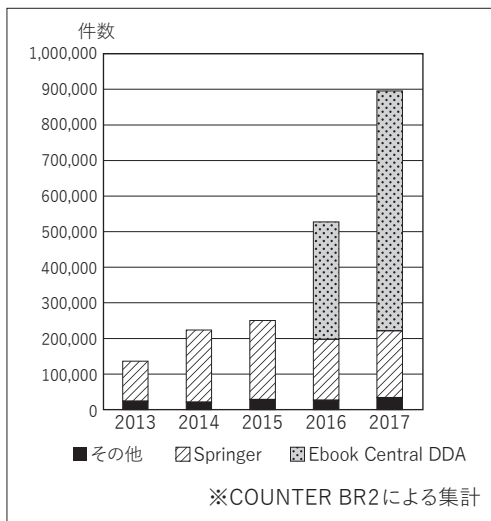
上記同様、諸言語の資料へのニーズが高く、Ebook Central DDAに関する質問が多い。日本語資料はあまり利用しない。特に試読タイトルの制限に対するストレスが大きく、購入依頼の方法について説明しても、留学期間が短い場合は依頼からアクセス開通までの時間が待てないなどの事情があり、なかなか納得してもらえないケースがある。なお、現在慶應義塾大学に所属していない利用者がKOSMOSを検索すると、海外電子ブックの書誌データが大量に検索され、（正しく）オンラインアクセスができるように見えてしまう。そのためか、卒業生から利用可否に関する問い合わせを受けることも多い（残念ながら利用はできない）。また、早稲田大学図書館のレファレンス担当者に伺ったところでは、KOSMOSで試読タイトルが検索されることを知らない早稲田大学の所属者から、「慶應義塾大学が契約している電子ブックの数と種類が多くて

うらやましい」という声をきくこともあるそうなので、慶應義塾大学側の担当者としては、やや複雑な心境になる。

4 利用件数の増加と今後への期待

利用に対する不満が噴出する一方で、検索可能な情報量が大きく増加しているためか、まずは研究や学習に必要な資料の情報を取得し、試読で中身を確認したうえで購入依頼できる仕組みを使いこなす利用者も確実に多くなっているようだ。というのも2016年度以降、試読を含む電子ブックパッケージへのアクセス統計が顕著に上昇しているのである。たとえば、海外電子ブックのチャプター別アクセス件数統計(表1)からは、特にEbook Central DDA導入後、アクセス数の急激な増加を見て取ることができる。

表1 海外電子ブックのフルテキスト利用件数
(チャプター単位/年)



往々にして「よく使っています」、「役に立ちます」といった感想は表に出ないものであるが、前述したLibQUAL+®調査の自由記述では、多くの不満に混じってポジティブな感想・意見も散見された。「電子ブックのサービスが充実している」「リクエストへの迅速な対応が助かる」「利用申請の使い勝手が良い」「もはや紙の本を利用することは少ないので、電子ブックを積極的に導入してほしい」「より充実を図ってほしい」などである。実際のところ利用者は、一部にアクセスできなければできないなりに、現況を受け入れて(ある意味ではさっさとあきらめ

て)、便利に電子ブックを活用しているのかもしれない。また最近では、教員からの要望により、授業の参考資料としてシラバスに上がるタイトルを、同時アクセス数を多く(あるいは無制限に)契約し、多人数で同時利用してもらうケースも着実に増えつつある。

利用者や図書館スタッフから挙がっているさまざまな不満を裏返すと、現時点の慶應MCにおける「契約電子ブックの利用」は、下記のように期待されているといえるのではないだろうか。

- ・多種類/多量/諸言語の電子ブックタイトルが提供されている。
- ・書誌のメタデータが充実し、KOSMOSを含む種々のアクセスポイントから必要なタイトルを探ることができる。
- ・KOSMOSの検索結果から直接、「購入済」「試読可能」の区分が判別できる。
- ・認証ログインを含み、最小限のクリック数で電子ブックを提供するプラットフォームへ到達できる。
- ・さまざまな電子ブック用のデバイスやフォーマットに対応した全文またはチャプターのデータを、同時アクセス数やデータ量/ページ数などに制限されることなく、簡単にダウンロードして手元で利用できる。

5 おわりに

2007年時点での電子ブック利用について、著者は「端緒についたばかり」と書いたが、約10年という時間が経過した現在であっても、電子ブックの提供・利用状況は、いまだ「過渡期にある」といえるだろう。慶應義塾大学内で実現し得る技術や工夫を最大限に駆使しているとはいえ、メタデータの不備やタイトルリンクの齟齬、アクセスに至るまでのクリック数の多さ、プラットフォーム毎のユーザーインターフェースの相違、使い勝手の悪さなどから、胸をはって「使いやすい仕組みを提供している」とは言い難い。それでも、KOSMOSを経由して利用可能となった電子ブックのタイトル数は、2007年当時と比べて飛躍的に増加したし(日本語のタイトル数も、海外タイトルほどではないが増加傾向にある)、学内アカウントによる認証を経てのアクセスは、慣れてしまえばそれほど面倒な手順にも感じなくなる(気がする)し、過去に比べてネットワーク

のスピードも格段に速くなった。不具合が多い現在であっても、たまには「今、自分に必要な電子ブックのコンテンツ」が、“just in time”のタイミングで発見・提供されて、利用者に「ああ便利だなあ、役に立つなあ」と思ってもらえている瞬間があるにちがいない！と信じている。

いずれ、電子ブックの供給ベンダーや出版社などとの情報連携がより進み、紙の本と同様に電子ブックのタイトル情報が国内外から常時供給され、システムや認証方式も進化し、「大学図書館が提供する電子ブックが本当に使いやすい」と思える環境が到来する……ことを夢想はするが、まだたくさんの細かな齟齬や不具合を、どうにか乗り越えていかなければならない状況にある。早稲田大学と慶應義塾大学の図書館システム共同運用開始(2019年度を予定)にあたっては、いよいよ本格的に「ディスカバリー・サービス」を含むインターフェースの提供を目指している。電子ブックデータの適切な表示とアクセス方法について、全塾レファレンス担当およびMCのシステム担当、電子資源担当だけでなく早稲田大学側の担当とも、協力しながら再検討していくことにもなるだろう。今後も引き続き、「過渡期」における利用者のストレスを減らし、目まぐるしく変動する環境に対応するための準備を進めていきたいと考えている。

注・参考文献

- 1) 保坂睦. 電子ブック導入その後 —メディアセンターにおける利用と展望. MediaNet. 2007, no.14, p.11-13.
- 2) 稲木竜. 慶應義塾大学における電子書籍の取り組み —ディスカバリーサービスの活用事例—. 情報の科学と技術. 2017, vol.67, no.1, p.14-18.
- 3) 2018年現在, PCIのデータを利用してリンクを表示する電子ブック類は, Ebook Central DDA, MeL (いずれも全学契約) の他, OECD iLibrary (全学契約), Clinical Key (信濃町のみ契約) がある。
- 4) PCIは本来, 書誌や論文, 辞書項目など粒度の異なる様々な学術関連データを含むインデックスの集合体 (ウェブスケール・インデックス) であり, KOSMOSのように書誌データのごく一部のみを利用する方法は必ずしも一般的ではない。
- 5) 浅尾干夏子, 藤本優子, 岡本聖. 電子学術書利用実験プロジェクト利用実験班報告: 第三期利用実験報告を中心に. MediaNet. 2012, no.19, p.28-32. および, 島田貴史,

慶應義塾大学における電子学術書利用実験プロジェクト
最終報告 既刊書・電子学術書の学術利用の可能性, 情報管理, 2012, vol.55, no.5, p.318-328.

- 6) 慶應義塾大学メディアセンター. “全塾共通ガイド: 電子ジャーナル・電子ブックを使う/電子ブック”.
http://libguides.lib.keio.ac.jp/kosmos_help/ebook,
(accessed 2018-08-22)
- 7) 慶應義塾大学メディアセンター. “LibQUAL+(R) 2017年度調査の概要と結果”.
<https://libguides.lib.keio.ac.jp/libqual2017>,
(accessed 2018-08-22)